

nature

部族文化と対峙する遺伝学研究

研究者とアメリカ先住民の小規模部族との紛争は、遺伝学研究に無用に大きな影を落としている。部族出身の研究者の支援を受けて、両者間で緊密な対話を行えば、両者とも得るところは大きいのではないだろうか。

原文： *Tribal culture versus genetics*

Nature Vol.430(489)/29 July 2004; www.naturejpn.com/digest

米 国南西部に居住するアメリカ先住民が、ある遺伝学研究をめぐる、研究者と対立している。具体的には、ある糖尿病の研究プロジェクトをめぐる、ハバスパイ族が研究者と大学を相手取って訴訟を起こしているのだ。この訴訟において、ハバスパイ族側は、アリゾナ州立大学やその他の研究機関に所属する研究者が、部族民からDNAサンプルを採取しておいて、当事者の同意を適切に得ることなく、研究目的に使用したと主張している。この研究プロジェクトのリーダーは、これを断固否定している。それと同時に、研究者たちは、善意の(つもりだった)研究作業について上述の申し立てがなされたことに当惑している。

この紛争に関しては、政治色を帯びた解釈がアメリカ先住民社会を駆け巡り、研究者に対する各部族民の不信感を煽っている。ゲノム研究の進展にとって絶好のタイミングである今、部族民にとっても研究者にとっても最も避けたいのは、根拠のないわさである。

この種の研究は数年をかけて実施される。そして今回の紛争は、研究者が、研究が終了するまでアメリカ先住民の被験者とのコミュニケーションを絶やさないと重要性を浮き彫りにしている (*Nature* Vol.430, 500, 6999; 2004 参照)。これまでの経験から、裁判所が、倫理をめぐる紛争を解決する場として適切でないことは明らかになっている。しかし、厳密な科学研究を進める際に、部族文化に理解をもって接する必要性とどのように折り合いをつけていけばよいだろうか？

一部の部族では、研究被験者に関する委員会を独自に組織し、その承認なくしてはいかなる研究プロジェクトも行えないようになっ

ている。研究プロジェクトが複雑で、研究者以外には理解が難しい場合には、諮問委員会が組織され、そのようなプロジェクトのモニタリングを担当するグループを支援している。また、部族自体によって管理され、モニタリングされるアメリカ先住民の遺伝子バンクの設立についても提案されている。この構想が実現すれば、これらの遺伝子から派生する製品の所有権を各部族に帰属させられるかもしれない。

これらの構想は、いずれも望みあるチャンスだといえるが、その一方で研究者と被験者の双方が責任を負うことを必要としている。もし研究によって何が実現されるかについて被験者が知りたいと思えば、その点に関する情報を絶えず得ることができれば、文化と科学の衝突は避けられるかもしれない。また、言葉と文化の障壁によって研究プロジェクトの進展が難しくなると考えられる場合に、特別なコミュニティ出身の研究被験者に対して、同意書の提出が繰り返し求められる事例が増えてきている。このように同意書の提出を繰り返し求めるというコンセプトは実施すべき価値のあるものではあるが、多くの時間を要し、経費を増やす恐れもある。もし研究者と被験者との間で情報が定期的に双方向に流れていけば、このようなコンセプトは不要のものとなるだろう。

一部の倫理学者は、研究被験者が同意書の細かい点にこだわり過ぎるあまり、研究に参加することが自分の出身部族のみならず人類全体の役に立つ好機であることを忘れてしまうとする見方を示している。しかしアメリカ先住民としては、このような見方を容易に受け入れることはできない。これまで何世紀に

もわたって自分たちの仲間や文化が虐待され、蹂躪されてきた彼らが過敏な態度をとることは無理もないことである。しかし、アメリカ先住民の文化が病気の治療に役立つと実感することがあれば、彼らにとって新たな形態の権利拡張となるかもしれない。

現在、数多くのアメリカ先住民の部族は、これまでに想像したこともないような経済的機会、例えば教育の機会や奨学金取得の機会などに恵まれている。ギャンブル施設からの収入によって、地域社会での各種サービスは充実し、アメリカ先住民の特別保留地に何世代にもわたって蔓延していた貧困に起因する病気を撲滅するチャンスが到来している。ところが、このようにして得られた経済力を利用して、部族の政治的目的による訴訟を進行するケースが頻繁に見られるようになった。アリゾナ州では、感受性が強く、思いやりのあるタイプの研究者が、ハバスパイ族のケースに関連した最近の出来事を見聞きして、特別保留地には近寄りたくない、と非公式に発言している。研究によって幅広い層に利益がもたらされる可能性があることを考えると、いずれの部族も、このような雰囲気になることを望んではいないだろう。

研究者と被験者を代表する人々は、お互いに手を差し伸べて、それぞれの文化のちがいを埋める努力をする必要がある。米国立ヒトゲノム研究所では、まさにそのことを目的とした活動に助成金を提供している。この活動を支援する独特な立場にあるのがアメリカ先住民の研究者だ。彼らもまた研究者・被験者間の対話を支援し、現代の遺伝学研究にとっての絶好の機会にふさわしい研究環境を作り出すことができるのだ。 ■